
ふくいミュージアム

1986. 11. 1

No.10

福井県立博物館



武人埴輪

第5回 特別展

「古鏡の美 —出土鏡を中心に—」 開催中!

(11月30日(日)まで)

博物館では、現在、第5回特別展として「古鏡の美—出土鏡を中心に—」を開催しています。ここでは、北陸で出土した資料を通して各時代の鏡の移り変わりをたどるとともに、特に平安時代後期から鎌倉時代にかけて、全国の山岳信仰遺跡や経塚などに埋納された鏡を中心に、集成展示を行っています。

展示品は東北地方から九州地方まで、国宝・重要文化財8件134点を含む76件410点を集めています。ここでは、展示の概要と主な展示品を紹介します。

A. 鏡の移り変わり

このコーナーでは、弥生時代末(3世紀頃)から江戸時代(17~19世紀)に至る銅鏡の歴史を、福井・石川両県下から出土した鏡を中心にたどります。中国からもたらされた舶載鏡とこれをまねてわが国で作られた仿製鏡の見られる段階、中国の強い影響から脱却して、わが国独特の文様・鏡形式が成立する和鏡の段階、持ち手のつく柄鏡の段階を、各々、用途の移り変わりと共に示しています。

B1. 山岳信仰と鏡

古代からの、山への崇敬の観念と、密教を中心とした山林修行、更に、峰々に宿る神は仏の仮りの姿であるという本地垂迹の思想などを背景として、山の仏や神の姿を鏡面に線刻した鏡像が成立しました。このコーナーでは、奈良県金峯山々頂や和歌山県那智経塚などから出土した鏡像類を中心に、京都市鞍馬寺経塚、栃木県男体山々頂、山形県羽黒山々頂御手洗池などから出土した鏡類を展示しています。

B2. 経塚と鏡

平安時代後期、世情の不安、末法の世の不安感から、貴族たちの間で、釈迦入滅より56億7千万年後に弥勒菩薩が到来するまで、書写した經典を地中に埋めて守り伝えようという経塚の造営が流行しました。ここでは、經典を悪霊・邪鬼より守るために経塚に埋納された鏡の数々と、それに伴って出土した紀年銘経筒などを展示しています。

C. 鏡をつくる

このコーナーでは、現在も神社の神鏡などを注文に応じて製作されている人間国宝角谷一圭氏により

復元された和鏡製作工程の模型を中心に、遺跡から出土した鏡の鑄型を展示しています。

D1. 文様を同じくする鏡

—同範鏡・同型鏡・同系文様鏡—

銅鏡の中には、全く同一の鑄型で鑄造された寸分違わない文様をもつ同範鏡と呼ばれるものがありますが、和鏡については、やわらかな真土型で作るために2面以上の同範鏡はできないとされています。



ここでは、いわゆる同範と考えられている栃木県男体山頂出土の3組6面をはじめとして、和鏡の中で、文様意匠および構図の同じもの、意匠は同じでありながら構図の違うものなどを比較展示し、これらの文様の類似性が何に由来するものなのかを考えています。

D2. 平安後期の同系文様鏡

和鏡の中で代表的な文様である、松鶴文・菊花文・山吹梅樹文の3種について、更にいくつかのバリエーションを集め、各々の出土地分布を示すことによって、各々の文様ごとに分布傾向が異なり、それが、鏡の製作工房、もしくは流通系統などの差を反映している可能性を指摘しています。

E1. 宋鏡の影響を受けた鏡

E2. 外来の鏡—湖州鏡—

12~13世紀頃は、中国宋との貿易により、様々な文物と共に、多くの鏡類ももたらされました。また、和鏡の中にも、宋鏡の影響を受けて成立したものと考えられている一群があります。ここでは、これらの鏡をとり上げ、その出土地分布を示すことによって、この時期の各地での外来鏡の受容のあり方を探っています。

冬の特別陳列（予告）

「ふるさとの文化財—仏画—」

期間 昭和62年2月7日(土)～3月20日(木)

61年度冬の特別陳列として、「ふるさとの文化財—仏画—」を開催します。

2月7日は本県では、「ふるさとの日」ということで、福井県の文化や伝統を再確認する行事が多くもたれています。もとより、そのような趣旨は県立博物館として開館以来当然持ち続けてきている訳ですが、今回その中でも特に仏画に焦点をあて展覧



を企画しました。

仏画は比較的遺品が数多く存していますが、それにもかかわらず、一般に目にされる機会はそれ程多いとはいえません。また一口に仏画といってもその種類は、形式的にも内容的にも

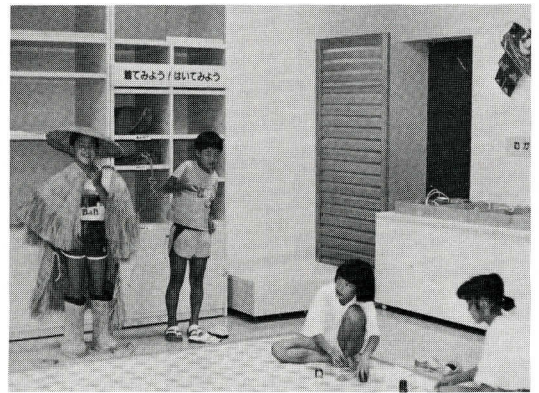


もいくつかにも分類されますが、それがまた一般の理解を難かしくしているともいえます。そこで今回は、1) 顕教の仏画 2) 密教の仏画 3) 両界曼荼羅 4) 涅槃図 5) 経典絵 6) 絵伝と内容的に分けて展示し、仏画に対する理解が容易になるように務めます。また全体の展示数もさほど多くはなく、観覧しやすいと思います。主な展示品は、重要文化財の万徳寺・不動明王像、同・弥勒像、滝谷寺・地藏菩薩像など予定しています。御期待下さい。

新しくなった体験学習室

体験学習室は、「モノに触れる、モノを動かすことのできる部屋、それらの体験を通じて能動的に学べる部屋」として、主に子どもたちに開放しています。開館以来、「常設展示では十分に理解できないところを具体的な資料によって、自由に手で触れ、動かしてみても資料をより理解してもらうという学習の場」として人気のあるコーナーです。そこで、このたび一部を模様替えし、さらに一層の利用を深めようとなりました。新しくなった主なコーナーを紹介すると、

1. 銅鐸をならしてみよう！ 弥生時代に豊作を祈る祭りの道具として使われたと考えられる銅鐸を復元したものが、実際にたたいてその音色を聞いてみるコーナーです。
2. 大むかしの道具にさわってみよう！ 縄文・弥生時代に使用された石器の復元があり、その重さや使用法をためすコーナーです。
3. 着てみよう！ はいてみよう！ わらで作った「わらじ」や「かさ」、「みの」を実際にはいてみた



り、着てみたりするコーナーです。

4. むかしのおもちゃ 「だるまおとし」や「ビー玉」など、むかしのおもちゃで遊ぶコーナーです。そのほか、「植物の名前を調べてみよう」、「土器に文様をつけてみよう」、「籠ののってみよう」などがあります。また、化石や土器、火おこし、臼など、見たり、さわったり、動かしたりするコーナーも従来通りあります。さらに、以上の各コーナーには、使用法や資料についての説明パネルも加え理解をさらに深めるようにしました。

研究ノート

越前康継の所持銘から

刀剣を所持する者の名が茎に切られているものを所持銘といい、室町時代に始まり、新刀以後もたびたび見られる。刀剣および刀工が歴史の流れの中に位置することはいうまでもなく、その意味から所持銘が単に刀工と所持者の関係を示すのみならず、歴史的背景にまで視野を広げられる点において、その史料的价值は頗る高いといえる。

越前康継は越前松平家および將軍家に抱えられた刀工で、佐藤貫一著『康継大鑑』に載せるごとく、その所持銘は初・二代にわたり、さらに本館蔵の刀(初代)およびボストン美術館蔵の刀(二代)を加えると、康継の所持銘は初代に本多飛驒守の20口をはじめ35口(13名)、二代に同人他8口(7名)を数える。これらのうち、ここでは越前家に関わる人物について、越前側の史料から判明したことを記してみたい。

本多飛驒守成重 特筆すべきことはないが、所持銘はすべて飛驒守と切り、慶長20年閏6月19日の任官以後の作である。また同年同月16日には、康継が大坂城落城の際焼けた名刀の再刃を命じられており、成重銘の20口(初代)中、14口が写し物であることから、成重が康継の再刃を機に深い関わりを持つようになったと考えることは可能である。ともあれこれだけ多くの所持銘がある本多成重が、康継をめぐる最重要人物であることに違いはない。

小笠原忠兵衛 『越藩史略』に、大坂の陣で越前勢が大坂城へ攻め入った際の模様を記しており、「成重の臣小笠原忠兵衛、火を大野主馬の宅に放つ」とある。また『朝野旧聞哀藁』に「小笠原忠兵衛覚〔従来の人物比定〕

1	本多飛驒守成重	22口(初20 二)	慶長18年越前家付家老として丸岡に入部
2	小笠原忠兵衛	1口(初)	成重の家臣
3	本多五郎右衛門	1口(初)	越前家江戸家老
4	本多七左衛門	1口(二)	忠直に仕え、光長の高田移封に従う
5	高田遠江守	2口(初)	江州浅井郡速水村高田出身、はじめ増田長盛の家臣で、後結城秀康に仕える。
6	高田小左衛門	1口(初)	高田一門、遠江守と同様
7	篠治大膳亮正時	1口(二)	福井藩で3000石をはむ

註. 1～4は『康継大鑑』、5・6は「康継所持銘にある高田遠江守・高田小左衛門のこと」(岡田孝夫「刀剣趣味」32号)、7は「康継大鑑を語る」(『刀剣美術』68号～福永酔劍氏指稿)によった

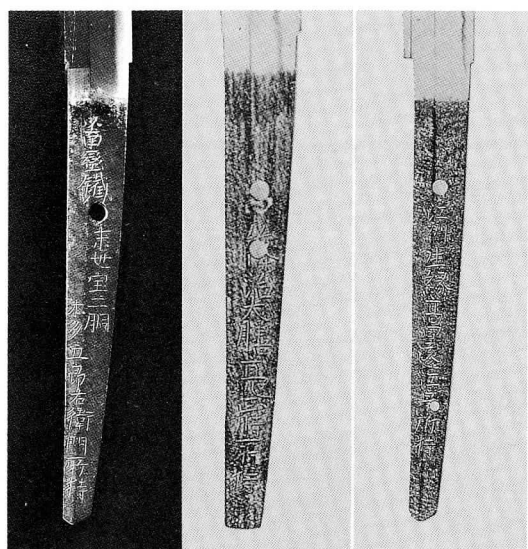
書」が載せられ、成重との主従関係がうかがわれる。(いずれも『大日本史料』に再収)

本多五郎右衛門 『諸士先祖之記』によれば、五郎右衛門正次は福井藩初代藩主結城秀康に仕え、四代藩主松平光通の代に及ぶ。秀康および二代藩主松平忠直の代の給帳には五郎右衛門の名は見えず、『隆芳院様(三代藩主松平忠昌)御代給帳』に800石(後1200石)とある。五郎右衛門は『越前人物誌』所載の「下坂文書」に見える宛名の人物で、二代康継の没後、三代目の分家にあたって越前家側の折衝役を務めた。従来の越前家江戸家老とする説は、根拠となる史料がなく、「下坂文書」の正保3年まで時代を下っても少々無理があると思われる。分家の際は家老として骨を折った訳ではなく、初代康継との関係からこの件に関与していると考えた方が妥当であろう。

本多七左衛門 『浄光院様(秀康)御代給帳』に大小姓として600石とあり、『忠直公御家中給帳』では1000石に加増されている。慶長19年頃、本多丹下(後飛驒守)・本多伊豆守・小栗備後守・岡島壱岐守と共に越前家の老臣という(『国事叢記』、元和7年に再び記される)。光長の高田移封に従う。七左衛門の所持銘は、他に兼先と思われる「越前国住下坂」銘の脇指にあり、作刀時期など非常に興味深い。

高田遠江守・後高田小左衛門 『諸士先祖之記』によれば、高田遠江一英は増田長盛の代将として関ヶ原の戦いに参戦したが、敗れて長盛とは手切れとされる。その後、「右衛門尉(長盛)の妻子ヲソレソレニ片付、京都ニ罷有候処、本多佐渡守殿、井伊兵部少輔殿御指図にて、慶長八癸卯正月、秀康公エ被召出」、2000石で抱えられた。寛永7年小左衛門一玄、家督。この高田家は代々小左衛門を通称としており、後高田小左衛門は、後の、すなわち後目の小左衛門と解すべきで、遠江守が息子の所持刀にと所望した一口であろうか。

ところで『豊国武鑑』に長盛の家臣として、高田遠江・高田小左衛門がそれぞれ5000石・800石と記される。これらは『諸士先祖之記』にある「遠江一英は増田時代に1万石を禄し、小左衛門と称す」、「小左衛門一玄は生国越前」の記述と食い違っており、増田時代に既に代替があったとも考えられる(岡田氏呈示の史料に見える天正19年の高田小左衛門一玄¹⁾も考慮に入れるべき)。康継と遠江守・小左衛門両名の関係



『康継大鑑』所載

は、岡田氏が指摘された高田家の出身地が下坂村と近接していることに起因するのであろう。所持銘にある「江州生縁」の文字がそのことを強く感じさせる。なお高田亀助については未確認である。

笹治大膳亮正時 『諸士先祖之記』によれば、大膳亮正時は秀康に仕えて光通の代に及ぶ。秀康・忠直代の各給帳に5300石(内2300石与力)とあり、『隆芳院様御代給帳』では1万石(内5000石与力)に増加されている。これらの史料には笹治～とあるが、「笹」と「篠」は同義であり、同一人物とするのに差し支えない。

藤野小刑部自珍 新たに判明した人物である。『黄門様(秀康)御代給帳』に藤野九兵衛(添書小刑部)200石とあり、『忠直公御家中給帳』では650石に増加されている。また『国事叢記』に大坂冬の陣への御備が記され、近習馬上23騎の一人にその名が挙がっている。小刑部の所持銘は3口を数え、忠直の側近として康継と深い関わりがあったと思われるが、それ以上は不明である。忠昌の代以後の給帳にその名は見えない。

慶長～元和期の福井藩は、秀康の死、久世騒動、大坂の陣、忠直乱行と家中騒然の大事件が相次ぐ。その中で康継の所持銘にある彼らが、それぞれどのような位置にあったかは上記の他明確でないが、このうち3名が同時に登場する史料がある。『国事叢記』に「越陽秘録」の記述として“忠直御悪逆并永

見右衛門御征伐事”と題する一項があり、次のように述べている。(元和8年)

「——前略——、永見右衛門・笹治大膳・本多五郎右衛門杯と多門と甚不和なりしかば、多門内々にて是等の面々を悪様に申成す。忠直卿にハ元より多門が云程の事悪と思召事無ければ、‘去バ是等を征伐すべし’と内々の御沙汰。五郎右衛門ハ斯と聞て‘逆も死す命、大膳と一処になりて死せば大成利なり’とて、私宅を焼払て家内を引具し、大膳と一所になりければ、大膳も大に悦び、打手を今やと待居たり。——中略——、又永見右衛門方へハ高田遠江毎度行向て‘自今多門と和順あるべき’由様々宥けれ共、更に承引なく、斯て12月17日 忠直卿関ヶ原より御帰国有。——後略——」

数ある忠直乱行の中でも、この後幕府が忠直を改易にした直接の原因の一つとされるこの事件は、寵臣小山田多門の讒言により忠直が家臣永見右衛門を討伐する内容である。本多五郎右衛門と笹治大膳の親密さは文中の表現によって明らかであるが、その一派の永見右衛門宅へ遣された高田遠江も彼らと近い間柄であったことは推測に難くない。本多五郎右衛門と高田遠江の所持銘は初代作にあり、笹治大膳のそれは二代である。越前家の家中が不穏な動きを見せ始める元和7年9月に初代が没していることから、これらの作刀の時期については一考の余地があるが、同一史料に密接な関係で登場する人物達が、共に康継の作刀を所持していることは、所持銘が歴史の傍証になり得る一つの証明であろう。

また、これら3名が忠直の代に至って藩の史書に登場するのをはじめ、本多七左衛門・藤野小刑部などが頭角を表わすのも忠直の代である。初代康継が彼らの注文によって打った時期が、秀康の没後間もなくとするものではないが、忠直の代になって彼らと康継の接近が容易になった家中の状況は想定し得ることであり、秀康によって束ねられていた康継を筆頭とする下坂鍛冶が、秀康の死後個銘を切るようになる現象と、強ち無関係ではないように思われる。

※慶長13年 大和太掾正則
同 14年 肥後太掾貞国
同 16年 播磨太掾重高

註. 越前松平家関係の史料は、それぞれ刊本およびマイクロフィルムによった。

(村野隆男)

収蔵資料の紹介

能面 邯鄲男 一面

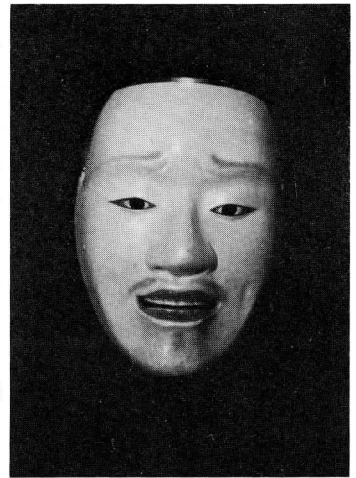
一般に能は室町時代の初めに、大和猿楽の結崎座の観阿弥・世阿弥父子によって大成されたといわれているが、世阿弥の『申楽談儀』によれば面の種類は、翁・鬼・年寄りたる尉、悪尉・笑尉・顔細き尉男・若男・女・年寄り一女という具合にあまり多くはなかったらしい。それが室町時代の末になるとかなり多くの種類の面が登場することになる。

「邯鄲男」は「邯鄲」の専用面として用いられる面であるが、「邯鄲」は寛正五年（1464）の糺河原勅進猿楽の初日に音阿弥によって演じられたことが知られ、また世阿弥の女婿金春禪竹の『歌舞髓脳記』にもあげられているもので、当時の代表的な演目の一つであったと考えられている。したがって邯鄲男は比較的早く成立した面であるといえよう。

いうまでもなく、「邯鄲」は唐代小説「枕中記」に由って、明の湯臨川が戯曲とした「邯鄲記」を元としたもので、貧しいが野望をもつ儒生の盧生という若者が、邯鄲の里で仙人の枕に伏し、栄華をきわめ

るものの末期の悲惨な一生を送る夢をみて目ざめると、それは粟飯の炊ける間のことでしかなかったという「邯鄲黄梁一炊の夢」の話である。唐物を珍重した当時の異国情緒へのあこがれと、夢幻的な趣きの内容で広くうけ入れられたものと思われる。主人公盧生の性格から、面の表現は、憂愁と若さと庶民性をあらわすために、眉根のしわを顕著にあらわし、頬に長めのえくぼを刻み、鼻がやや太めにつくられる。

本面は江戸時代初めの作と考えられるが、以上のような邯鄲男の表現をうまく調和させている。（長坂）



朝倉義景感状

感状とは武將が部下の戦功を賞して与えたもので、これを受けた者は、恩賞請求や家名誇示の証拠として長く保存したものである。

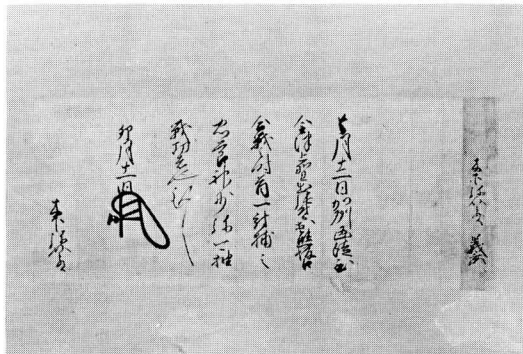
本史料は越前の戦国大名朝倉義景が発給したもので、「去月十二日」（永祿十年三月十二日）に、金津熊

坂口（現坂井郡金津町）での戦いで戦功のあった木下弥介なるものに対して出されたものである。

当時、朝倉氏は加賀の一向一揆との抗争を続けていた時で、本文中の「加州凶徒」とは加賀の一向一揆をさすものである。

現在、県内には朝倉義景の感状は本史料を含め4点あまりしかなく、極めて貴重な史料といえる。

全文は次のとおりである。（山形）



去月十二日加州凶徒至
 金津上野出陣付而於熊坂口
 合戦之時首一討捕之
 忠節神妙弥可抽
 戦功者也 謹言
 卯月十一日（義景花押）
 木下弥介とのへ



考古学の先達 上田三平

若狭出身の上田三平氏は、考古学並びに史跡、文化財保護行政の本県のみならず日本の先達です。

氏は、明治14年小浜市（もとの国富村羽賀）に生まれました。明治33年、福井師範学校に入学し、卒業すると小浜高等小学校に奉職しました。その後、母校の附属訓導に転任、更に師範学校教諭になりました。この間の努力はたいへんなもので、授業にも熱心で自信をもって教授されたそうです。

大正3年、氏が35歳の時、県の依頼により、当時東洋史の最高権威といわれた内藤湖南博士の県内史跡の調査に随行し、啓発されることが大きく、このことがくしくも上田氏の生涯を考古学に没頭せしめる機縁となりました。

大正6年、福井県史跡勝地常任委員を命ぜられ、県内史跡を訪ねて4年間昼夜東奔西走しました。その成果を『越前若狭の史蹟』として刊行しました。

この本は、今から53年前に出版されたものですが現在もなお、福井県の考古学研究の原典としての位置

を占め、研究者必読の書となっています。

大正10年、福井県での調査成果が認められて、石川県に招かれ、史跡名勝天然記念物調査嘱託となり在勤3年にして、精細・周到な報告書を二編刊行しました。

大正13年、史跡のメッカ奈良県に招かれ、奈良県嘱託として、平城宮跡の発掘調査を始め数々の調査をし奈良県指定史蹟報告書を刊行しました。中でも平城宮跡の発掘は、歴史時代史跡の調査に発掘を導入せねばならぬことを最初に唱導された点で高く評価されています。

昭和2年から20年まで、内務省及び文部省に史跡調査嘱託として勤められ、全国を研究の舞台として活躍されました。その中でも薬園史という例のない仕事、東北地方の払田・城輪両柵の発掘、登呂の遺跡の発掘などは、特に今日の考古学の発展、史跡の保存顕彰にも大きな指針を与えられたことでたたえられています。

昭和25年、横浜で69歳の天寿を全うされました。

福井県での研究生活から、石川県・奈良県を経て、国へと栄転され、考古学研究に生涯をささげられた上田三平氏は、正に郷土の偉人であります。（青木）

ビデオライブラリーから

一乗谷 一甕った戦国城下町一

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は、越前の戦国大名朝倉氏5代、約100年の栄華の跡をよくとどめる全国的にも数少ない遺跡です。

遺跡は、昭和42年から発掘が開始されて、今年で20年にもなります。これまでに、発掘調査した面積は約7.2ヘクタール、整備した面積は約7ヘクタールで、史跡の3割にもなっていないのです。しかし、今までの調査で、数々の成果をあげてきました。

戦国大名の館の実態や大規模な重臣の屋敷、下級武士や職人の小さな屋敷・寺院などが、縦横にはりめぐらされた幅広い街路に面して、整然と建ち並ぶ町並の様子などが明らかにされました。また遺物では、華やかな朝倉文化を物語る茶器や花生の破片、墨硯、職人の存在を裏づける火銃銚や数珠関連の遺物など数多くの貴重な遺物が出土しています。

このビデオでは、洛中洛外図屏風に見るようなにぎわいを見せた、戦国城下町一乗谷をあますところなく映しています。（青木）

トチの実を食べる

トチは耕地の少ない山間地では第二次世界大戦ごろまで大切な食糧として利用されてきました。トチの実は栗よりも大きくでん粉を多量に含んでいますが、アクがたいへん強く複雑なアク抜き工程を経なければ食べることができません。

食べ方や伝承によってアクぬきのしかたは土地ごとに少しずつ違っていますが、この番組では大野市下打波のトチ餅の作りかたを取上げました。固い皮を取り、つぶし、清水に漬けさらに灰汁にあわせるという一週間に及ぶ工程を追いながら、山間地でトチを大切にしてきたことも紹介しています。

撮影のときに作っていただいたトチ餅は独特な風味を持つおいしい物でしたが、かつてトチは穀物の不足を補う一段劣る食物でした。冬の間、下打波は無人になってしまいます。このような生活の厳しい所にトチを食べる技術は伝えられてきたのです。

（坂本）

県立博物館 秋冬の行事!!

行 事 名	日 時	内 容	対 象
特別展 古鏡の美 —出土鏡を中心に—	10月21日(火) ↓ 11月30日(日)	古来より姿を映す道具として、あるいは権力の象徴として、また信仰の対象や祭儀の呪具として人の生活に関わってきた鏡を一堂に展示します。	観覧料 一般 400円 大・高中生 300円 小・中学生 200円
特別陳列 ふるさとの文化財 —仏 画—	2月7日(土) ↓ 3月20日(金)	本県に数多く遺り、見る機会の少ない仏画を一堂に展示し、わかりやすく紹介します。	観覧料 常設展と共通
講演会 「日本の鏡」 東京芸術大学教授 中野政樹先生	11月9日(日)	日本の鏡の移り変わりを、その文様や形、更に鍛造技術などを通してわかりやすく話していただきます。	無 料 対象…中学生以上
講演会 「小さな世界からの歴史」 国立歴史民俗博物館教授 塚本学先生	3月22日(日)	幕府という権力者側からでなく、一般民衆の側から見た江戸時代について話していただきます。	無 料 対象…高校生以上
考古教室 中世の考古学	11月8日(土) 11月15日(土) 11月16日(日) 11月29日(土)	古代から中世の信仰の一断面(博物館 久保) 中世の山城 (博物館 青木) 中世山城めぐり (見学会) 豊原三千坊の発掘成果(丸岡町教委 金元賢治氏)	無 料 対象…中学生以上 (見学会のみ傷害保険が必要)
歴史教室 北陸街道再発見	2月14日(土) 2月21日(土) 2月28日(土) 3月7日(土)	北陸街道と宿駅Ⅰ(博物館 村野) Ⅱ(博物館 山形) 若狭街道と熊川宿(熊川宿保存委員会副会長 亀井清氏) 幕府の視察—延享3年の巡検—(博物館 村野)	無 料 対象…小学校高学年以上 (3、4回目は高校生以上)
映画会	11月2日(日)	「和鏡」 「登り窯を移す」	無 料 対象…入館者
学習会 しめ縄を作ろう	12月7日(日)	しめ縄の作り方を習い、正月の意味を学びます。	材料費が必要 対象…小学校高学年と保護者
映画会	12月14日(日)	「雪」	無 料 対象…入館者
学習会 竹とんぼを作ろう	1月11日(日)	「竹とんぼ」などむかしのおもちゃをつくります	材料費が必要 対象…小学校高学年
映画会	2月8日(日)	「ふるさとあの日」	無 料 対象…入館者
映画会	3月29日(日)	民俗関係(内容未定)	無 料 対象…入館者

〈刊行物の御案内〉

博物館及び友の会では、次のような刊行物を出しています。いずれも、受付にてお求め下さい。

- 常設展示 図録 ￥2,000(〒300)
- 特別展「北前船と越前若狭」図録 ￥1,000(〒250)
- 特別展「日本海のおいたち」図録 ￥1,000(〒250)
- 開館記念特別展「福井の文化財」図録 ￥2,000(〒250)
- 「はくぶつかんミニガイド」 ￥100(友の会)
- 絵はがき 1枚￥50、セット(10枚) ￥500(友の会)

資料収集に御協力下さい

ふくいミュージアム No.10 1986. 11. 1

編集 福井県立博物館
発行 福井市大宮2丁目19-15
〒910
☎ 0776-22-4675(代)
印刷 出口印刷株式会社